



## 研究論文 (Articles)

フリースクール設立者の価値観の変容プロセス<sup>1)</sup>

—ライフストーリーの分析から—

橋本 あかね

(大阪府立大学大学院人間社会学研究科)

The Transformation of a Free School Founder's Values

—A Qualitative Analysis of the Life Story by Trajectory Equifinality Modeling—

HASHIMOTO Akane

(Graduate School of Humanities and Social Sciences, Osaka Prefecture University)

The purpose of this study was to reveal the transformation of the values of a person who founded and ran a free school by analyzing her life story. Semi-structured interviews were conducted with a woman who worked at a free school, and then founded her own and ran it for more than ten years, though she herself was adapted to public school in her early childhood. The interview data were analyzed by employing Trajectory Equifinality Modeling. The analyzed data showed she had changed her values of the public school and society after the encounter with a free school, and founded her own free school based on those values. However, she reconsidered these values over the course of running the free school. Therefore, she became conscious of her values in life, which included respecting individual values. Moreover, the consciousness relieved her difficulties with her mother from her early childhood and illuminated the guiding values for the rest of her life.

本稿の目的は、フリースクールの設立・運営を通して、設立者の価値観がどのように変容していくのかについて、ライフストーリーの分析から明らかにすることである。学齢期には学校親和的であったにもかかわらず、フリースクールで働いた後、新たにフリースクールを設立し、10年以上運営してきた40代女性の事例を対象とし、複線径路等至性モデリングを用いて分析を行った。その結果、フリースクールに出会ったことで変容した学校や社会に対する価値観をもとに新たにフリースクールを設立し、運営を継続する中で変容した価値観をさらに問い直したことで、精神的な自由の尊重という人生全体を貫く価値観に気づいていく設立者の姿が明らかになった。そして、その気づきは幼少期から続く母親との関係における生きづらさの解消につながると同時に、今後の人生の基盤となる価値観を提供していた。

**Key Words** : Free School Founder, Values, Transformation Process, Life Story,  
Trajectory Equifinality Modeling

キーワード：フリースクール設立者、価値観、変容プロセス、ライフストーリー、  
複線径路等至性モデリング

1) 本研究は、大阪府立大学大学院人間社会学研究科に提出した修士論文の一部であり、2014年度日本教育社会学会第66回大会、2015年度日本質的心理学学会第12回大会、2016年度日本社会教育学会第63回大会での発表の一部を再構成したものである。

## 本稿の背景と目的

### フリースクールにおける支援者としての大人の存在

近年、不登校の子どもたちが通う学校外の場として、フリースクールに注目が集まっている。フリースクールは、1970年代後半以降、不登校の児童生徒の増加と軌を一にするように増加し(菊地・永田, 2001)、今日では、不登校の子どもはもとより、障害などを理由に学校から排除された子なども対象に居場所や学びの場を提供している(たとえば、竹村, 2008)。

不登校の子どもへの対応として設立されたフリースクールにおいては、安心して過ごせる居場所であることに重きが置かれ、大人による強制や押しつけが排され、自由な空間と時間が提供されてきた(藤田, 2002)。たとえば、東京シューレ<sup>2)</sup>の奥地圭子は、フリースクールの特徴として、活動を「子どもの興味、関心、意欲に依拠してつくっていく」(NPO 法人東京シューレ, 2000, p.17)点を挙げている。

他方で、海外のフリースクールの実践に感化され、その方法や思想を取り入れてつくられたフリースクールも存在する<sup>3)</sup>。そこでも、子どもの主体性や自主性に重点が置かれ、自由な活動や体験学習を中心に実践が展開されてきた(藤田, 2002 前出)。

このように、設立の経緯に違いはあるものの、子どもの主体性を重んじて実践を展開するという点においては共通している。

同様に、フリースクールにおける子どもと大人の関係を扱った先行研究においても、主体としての子どもの焦点が当てられ、大人は子どもをサポートする支援者と位置づけられてきた。たとえば、朝倉(1998)は、子どもとスタッフ(学校の教職員に相当)の関係の特徴として、子ども中心、子どもの気持ち

を受けとめること、子どものやりたいことの実現の手伝い、柔軟に子どもの実際に即することを挙げており、「子ども・若者が中心の活動というのがあくまでも前提」(p.320)であると述べている。また、佐川(2015)は、フリースクールにおける子どもの活発な活動の背景には、「かれらを地道に見守り、支える関係」(p.17)があると述べている。

以上のように、フリースクールにおいては子どもを主体におく関係性が強調され、主体としての大人には焦点が当てられてこなかった。

### 主体としての大人の価値観の変容に着目する必要性

他方、フリースクールとも深い関わりのある不登校の親の会を対象とした研究では、大人の価値観の変容に着目したものが散見される。たとえば、松本(2004)は親の会に参加することを通して、母親がわが子に対する認識とともに、自分自身の生き方も変えていく過程を描いている。また、山田(2011)は参加者がそれぞれの経験を語り、聴き合う親の会の活動を、標準的なライフコースを問い直し、別様の物語に書き換える実践として捉えている。これらの知見を踏まえると、フリースクールに関わる大人自身にも何らかの価値観の変容が生じているのではないかと推測される。ここでの価値観とは、自らの人生において何に価値をおくかに関わるものの見方・考え方の枠組みをいう。

成人の学習に関する理論は、Knowles(1980; 2002)により、自己決定学習の理論と実践を土台としたアンドラゴジー(Andragogy)として体系化された(p.513)。しかし、その後文化的・歴史的・社会的文脈とかけ離れたところで成人学習者像が提示されている点が問題視され(渡邊, 2002, p.126)、成人の認識枠組みの変容に着目したMezirowなどによって変容的学習理論が提唱されるようになる。変容的学習理論は近年注目を集め、再評価されている(正木, 2016など)。このような成人学習理論をめぐる動向からも、主体としての大人の価値観の変容に着目する意義が示唆される。

以上を踏まえ、本稿では設立者のライフストーリーの分析を通して、フリースクールに関わる経験により、大人の価値観がどのように変容していくの

2) 1985年、親の会(不登校の子どもを持つ親を中心とした自主的な組織)を母体として元小学校教師の奥地圭子を中心に設立された学校外の子どもの居場所・学びの場である。登校拒否を否定し、学校復帰を求める風潮に対し、子どもの成長は学校のみではないとの思いから、子どもの気持ちを尊重し、子どもを受け止め成長を支援する考え方や子ども中心の活動の輪を広げてきた(NPO 法人東京シューレ, 2013)。

3) 「地球学校」や「なわて遊学場」など、すでに活動を終了しているところもあるが、現存するものとしては、1990年に設立された「わく星学校」がある。

かを明らかにすることを目的とする。それにより、子どもの主体性に焦点づけられてきたフリースクール研究に、大人の学習と変容という新たな視座を加えることを目指す。ライフストーリーを分析の対象としたのは、フリースクールを通した価値観の変容を描くためには、そこに至るまでにどのような経験をし、それによってどのような価値観を獲得してきたのかを丁寧にたどることが必要とされるからである。また、フリースクール実践者による書籍や記念誌(奥地, 1991; 東京シューレ 20 周年祭実行委員会, 2005 など)は存在するが、それらから明らかになるのは実践の内容やその変化であり、フリースクールを通した価値観の変容までは明らかにすることができないと判断したことも理由の1つである。

なお、本稿におけるフリースクールとは、協力者の自己定義によるものであり、筆者が特定の実践を「フリースクール」と定義しているわけではないということをお知らせしておく<sup>4)</sup>。

## 研究方法

### 1. 分析方法

本稿では設立者の語りを分析する手法として、複線経路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling: 以下 TEM) を用いる。TEM とは、時間を捨象せず、個人の変容を社会との関係で捉え、記述しようとする方法論である。人間を常に外界との相互作用を行う開放システムとして捉えるシステム論に依拠する点と、時間を捨象して外在的に扱うことをせず、個人に経験された時間の流れを重視するという特徴を有している(安田・サトウ, 2012, pp.1-2)。したがって、フリースクールを通した設立者の価値観の変容プロセスを明らかにしようとする本稿の目的を達成するには、有効な手法であると考えられる。

4) 藤根・橋本(2016)は、量的調査で得られたデータを理念・方針と活動実態に関する6つの得点を用いて分析し、フリースクール等の学校外の学び場の特徴を示そうとした。しかし、フリースクールは他の組織に比べて得点の分散が非常に大きかったことから、「フリースクールを名乗る組織の理念や実践は多様である」(p.94)と結論づけている。本稿もその指摘を踏まえ、協力者の自己定義によることにした。

### 2. 対象の選定および調査方法

フリースクール設立者で10年以上の運営経験のある人を対象に、歴史的構造化ご招待 (Historically Structured Invitation: 以下 HSI)<sup>5)</sup>を行った。設立者でありかつ長期間の運営者であることを条件としたのは、フリースクールを設立・運営することと価値観の変容の関連性について明らかにするためであり、設立後数年で閉鎖されるフリースクールもあることから、長期間の運営者に限定する必要があるためである。その結果、30代から70代の男性4名、女性2名、計6名の協力者を得ることができた。

インタビューは、ナラティブ・メソッド(やまだ, 2007)を参照しながら、ライフストーリー・インタビューを行った。半構造化インタビューを用い、中心的な質問項目として、フリースクールと設立者の今後などに関する質問を用意したが、設立者の自由な語りを損なわないよう対話の形式を意識してインタビューを行った。

その後、6名のデータを下記の手続きにより分析し、それぞれ TEM 図を作成した。

表1 インタビューの概要

	実施時期	所要時間
第1回	2014.2.25	1時間33分
第2回	2015.8.7	59分

本稿では、Eさん(40代女性)の事例に絞って考察する(インタビューの実施時期や所要時間については表1を参照)。その理由は、本稿の目的に照らして、6名の中で唯一学校親和的な学齢期を送ったEさんの事例を取り上げることで、学校とは異なる理念や方法に基づいて実践が展開されるフリースクールを通した価値観の変容をより鮮明に描くことができると考えたためである。また、本稿の1人という数は、協力者個人がたどった径路の深みを探ることができるという利点がある(安田・サトウ前掲書, pp.5-7)。

5) HSIとは、研究者が関心をもった等至点を経験した人をお招きして話を聞くという手続きである(サトウ, 2015a)。

### 3. 分析手続

第1回インタビューで得られた音声データから逐語記録を作成し、KJ法（川喜田，1967）の手順を参考に切片化してラベルをつけた後、カテゴリーに分類する作業を数回繰り返した。カテゴリー化したものを時系列に並べてEさんの経験を再構成し、TEMを用いて分析した。本稿では、【フリースクールを設立する】と【フリースクールを継続する】を等至点に設定し、そこに至る径路を描いた。加えて、両極化した等至点として【フリースクールを設立しない】と【フリースクールを辞める】を設定した。その理由は、等至点として定めた経験に過度な価値の重みづけがなされてしまうことを防ぐためであり、かつ、分析を進めるうえで、背景に沈み込んでいる径路の複線性・多様性への洞察を促すためである（安田，2015：43-44）。また、分岐点を【本を通し

てフリースクールに通う子どもの声に出会う】と【妊娠・出産】に設定し、必須通過点は【生きづらさを感じる体験】、【フリースクール設立につながる出会い】、【フリースクールの意味を問い直す】に設定した。さらに、社会的助勢、社会的方向づけ、偶有性、突発的出来事、価値変容経験を加えて分析を行った（表2）。

その後、作成したTEM図を見てもらいながら、第2回インタビューを行い、TEM図を修正した。修正したTEM図はメールにて協力者に確認してもらい、了承が得られるまで修正を続けた。加えて、TEMが飽和状態に達したことを示すセカンドEFP（協力者にとっての等至点）（サトウ，2015b）が明らかになった段階で分析を終了した。

なお、以下では方法論そのものを指す場合はTEM、モデル化されたものを指す場合はTEM図と表記する。

表2 TEMの概念と本研究における位置づけ

用語	意味	本稿における位置づけ
等至点 EFP (Equifinality Point)	異なる径路をたどりながらも類似の結果にたどり着く点で、研究上の焦点化がなされ、かつ対象者にとっても重要な点	フリースクールを設立する フリースクールを継続する
両極化した等至点 P-EFP (Polarized Equifinality Point)	等至点の補集合	フリースクールを設立しない フリースクールを辞める
分岐点 BFP (Bifurcation Point)	分岐や選択が生じて、結果的に径路が複線化する結節点	本を通してフリースクールに通う子どもの声に出会う／妊娠・出産
必須通過点 OPP (Obligatory Passage Point)	多くの人が経験するような経験であり、かつ等至点に至る径路にあって重要なもの	生きづらさを感じる体験／フリースクール設立につながる出会い／フリースクールの意味を問い直す
社会的助勢 SG (Social Guidance)	等至点に近づくことをサポートする力	子どもの今を信じないまなざし／全国のネットワークとのつながり／親の会との出会い直し／親の会の人たちの支え／家族や両親のサポート／求心軸としての不登校／何があっても毎日やって来る子どもたち／スタッフの存在
社会的方向づけ SD (Social Direction)	等至点に近づくことを阻害する力	学校に行くことが当たり前という価値観／学歴にこだわる母親からのプレッシャー／学校に行かないことに対する子どもや親へのプレッシャー／特別支援教育の法的位置づけ／高校無償化・広域通信制高校の急増／家庭の養育基盤の低下／度重なるトラブル／厳しい雇用情勢
偶有性	予期せぬ一歩の契機となる出来事	親の会との出会い直し
突発的出来事	たまたま起きた出来事のうち、個人に対して大きな影響を与える出来事	フリースクールPのOBの死
価値変容経験 VTE (Value Transformation Experience)	個人の価値が変わるような大きな出来事	徹底して子どもの声を聴く実践に出会う／親の会で新しい価値観に出会う

#### 4. 倫理的配慮

本稿のインタビュー調査に関し、筆者が所属する大学院の研究倫理委員会の承認を得た。そのうえで、協力者に対して、研究の内容、調査への協力を拒否したり、途中で辞めたりしても、一切不利益が生じないこと、支障のないことのみを語ってもらうこと、インタビューの内容は研究目的以外には一切使用しないこと、論文等を作成する際には匿名にしたり、本人と特定できるような内容を修正したりして、プライバシーを厳守することを文書と口頭で説明した。これらの説明に対する同意として、同意文書に署名してもらったうえで、調査を開始した。

インタビューの内容については、対象者の同意を得たうえでICレコーダーに録音した。得られた個人情報や逐語記録の作成にあたり、対象者の氏名や関係する地名などはすべて匿名化した。文章化した後、ICレコーダーの音声データは完全に消去した。

分析結果についてはその都度協力者にフィードバックし、論文作成の際にも公開の可否について事前に確認をとった。

### 分析結果

本節では、6名のTEM図を照らし合わせて作成した時期区分にしたがって分析の結果を示す。具体的には、【フリースクールを設立する】と【フリースクールを継続する】という等至点と、6名に共通する出来事として抽出された【生きづらさを感じる体験】、【フリースクール設立につながる出会い】、【フリースクールの意味を問い直す】を用いて4期に区分した。なお、引用した語りデータは読みやすさを考慮して、必要最低限の修正を加えた。以下、TEMの基本概念とそれに対応するラベルやカテゴリーは【 】, Eさんの語りからの引用は「 」, 筆者による強調は〈 〉, 筆者による補足は（ ）で表している。また、引用箇所末尾にある日付は、インタビュー実施日を示している。

#### 1. 第I期：生きづらさを感じる体験

幼少期のEさんは母親が良いと思うものへと向かうように期待・誘導され、それに従う子どもだった

が、一方でその反動から一人で遠くまで自転車で出かけるなどのやんちゃな行動も繰り返した。他方で、母親から「大事にされてる感じ」や「受け止められてる感じ」も受け取っており、それゆえにEさんは母親を「悲しませちゃいけない」「裏切っちゃいけない」という思いを抱き、自分の気持ちに蓋をして母親とは「円満にずっとやってきた」。

しかし、中学生になると、【〈良い子〉を演じる自分に違和感を覚える】(OPP)ようになり、高校生になると、母親から離れるために「絶対家を出る。こっから距離を取るしかない」と考えるようになった。

母の価値観だけではなく、もっといろんな生き方があるんじゃないかと漠然とっていて、意識をしてなかったなあって今から考えるといます。なんか、自分にとったら家庭って、家庭環境って、当たり前というか、疑わないというか。そんなに別にすごくつらい思いをしてたわけではないけど、なんかそれしか知らないけど、なんか違ったんだなと今となったら思います。(略)なんか違う世界を見てみたいとか、もっといろんな人と会ってみたいとか、そういうふうに思ってたなとは思うんですね。《2015.8.7》

そうして、【学歴にこだわる母親からのプレッシャー】(SD)も「うまく利用」して、家からは通えない大学に進学したEさんは、人間への関心から心理学や教育学を学んだ。また、ボランティアサークルで障害を持つ人の介助を経験したことで、障害者を自分たちとは「違う人」とみなす両親の価値観とは異なる価値観に出会って視野が広がった。同じ頃、パット・モンゴメリー<sup>6)</sup>や、ジョン・ホルト<sup>7)</sup>

6) アメリカのクロンララスクールというフリースクールの設立者で、National Coalition of Alternative Community Schools (全米フリースクール連合)において中心的役割を担っていた人物である。当時新聞記者であった大沼安史の誘いで1982年に来日した際には大きな反響を呼び、講演等の記録は『続・教育に強制はいらない』(大沼, 1982b)というタイトルで出版された。

7) 「Home Based Education (家庭に拠点を置いた教育)」の提唱者であり、アメリカのボストンを拠点に運動として現実化を図っている人物である。また、全米各地のフリースクール運動に対する支援を積極的に行うとともに、理論的な指導者としても運動を支えてきた(大沼, 1982a, pp.138-142)。

など、学校以外の教育実践に関わる人が書いた本を読んだ。それでも、「【学校には行って当たり前】という価値観】(SD)が揺らぐことはなく、卒業論文でも学校の存在を前提に学校のスリム化を扱った。

大学卒業後は、発信することへの関心と多様なものの見方や価値観に触れたいという思いから、生身の人間が生きている過程に触れることができる人文系の出版社へ就職した。広告をつくる仕事はおもしろかったが、やがてEさんは自分で直接発信する現場への関心と会社の体質への違和感を抱くようになり、そのことが第Ⅱ期での退職につながった。退職という選択は安定した生活を重視する母親に大きな衝撃を与え、そうすることが「私の中ではマイナスではなくプラスなんだ」とEさんが説明しても理解してもらえなかった。

## 2. 第Ⅱ期：フリースクール設立につながる出会い

仕事で訪れた書店で偶然手に取った【本を通してフリースクールに通う子どもの声に出会った】(BFP) Eさんは、それまで意識下にあった学校的な価値観に対する疑問が引き出されるのを感じた。この子たちに「ぜひとも会いたい」と思ったEさんは、「ボランティアでいいから関わらせて」というつもりでフリースクールIの門を叩く。ところが、出版社での経験を買われ、家で育つ子どもたちをサポートする新規事業の担当を任されることになった(OPP)。

フリースクールIに関わる中で、Eさんは【徹底して子どもの声を聴く】(VTE)という実践に出会い、大人が子どもに教えるという学校のやり方とは異なる子どもへの関わり方を知った。

中途半端なことじゃなくて、やっている場所だったので。徹底して子どもの話を聴く、子どもの声を聴くということ。こっだけ、やりぬいてはるところを一緒に見さしてもらったっていうのは、結構おっきくて。そういうふうにする、しないと、なんか大人の自己満足になるんだなっていうのは、学ばせてもらったなと思うんで。《2015.8.5》

また、親の会に参加することも、学校の存在を絶対視しない新たな価値観に出会う機会となった(VTE)。

親の会は全部出ようって思ってた。なんで全部出ようって思ってたかって言うと、なんかすごく考える、考えさせてもらうものが深かったんで、とにかく1個も逃したくないみたいな気持ちがあって。(略)とにかくありとあらゆるやつに出て。学校に合わないってどんな気持ちなのかとか、そっからどんなふうに自分は考えようとしてるのかとか、子ども本人の人とか、親の思いとか(略)。そういうので、とにかくもう、教えてもらうことがすごく多くて、それがものすごく自分にとってもそれまでなかった価値観だったので、新鮮でした。《2014.2.25》

これらの経験は、「人生を変えるぐらい」大きくて深いものとなり、EさんはフリースクールIとの出会いを人生における転機と位置づけている。しかし、Eさんは第Ⅰ期の時点ですでに母親が提示する価値観に生きづらさを覚え、そこから抜け出す方法を模索していた。そのような経験があったからこそ、EさんはフリースクールIが提示する新しい価値観を受け入れ、自分のものにしていくことができたのではないかと考えられる。

## 3. 第Ⅲ期：フリースクール設立からフリースクールの意味の問い直しに至るまで

そこまでのめり込んだフリースクールIであったが、【妊娠・出産】(BFP)を機にEさんは休職した。「結婚はしないけれども子どもは産む」という選択は、結婚を経て出産することが当然と考えていた母親に大きな衝撃を与えた。

他方、Eさん自身は休職したことで時間ができ、図らずも自身の今後についてじっくり考えた。その中でEさんの頭に浮かんだのが、子どもが育つ場所が学校しかない社会を変えるために、「こういう場所がとにかくひとつでも多くあったほうがいい」という思いだった。パートナーとも相談し、「別でひとつ自分たちで恥ずかしくない場所をつくりたい」

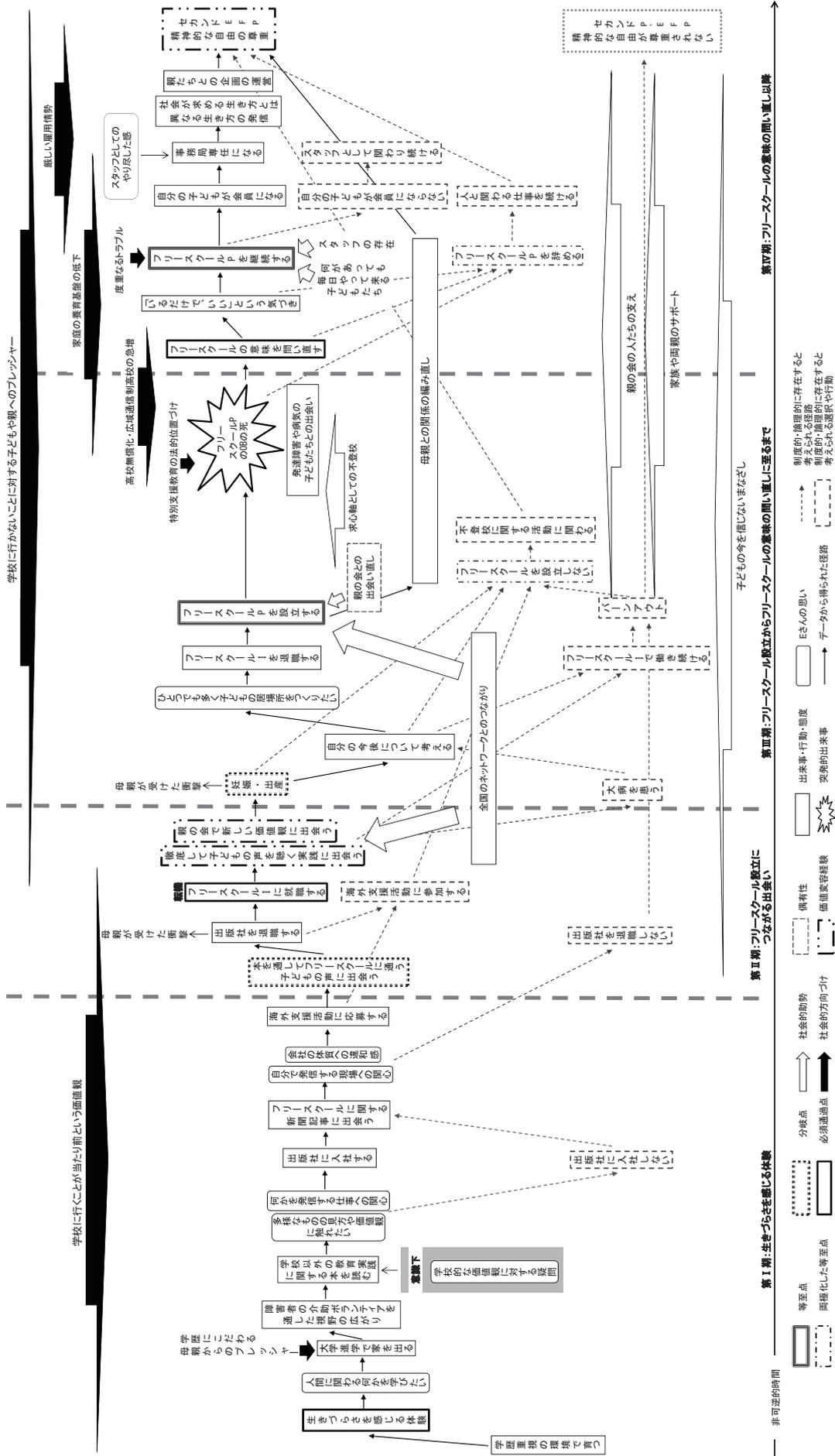


図1 EさんのTEM図

という決心をしたEさんは、フリースクールIを退職し、【フリースクールPを設立した】(EFP)。当時のEさんは、「ちゃんと子どもを信じて、みんなであつていく場所である」というIの方針から「ぶれないように」との思いを抱いていた。

設立の大きな原動力となったのが、【親の会との出会い直し】(偶有性)であった。縁のない土地での立ち上げだったため、親の会の人たちは「すごく頼もしい」存在としてEさんの目には映った。また、フリースクールI時代からの【全国のネットワークとのつながり】(SG)も大きな支えとなった。

設立当初は、「学校に行かない(不登校)」を理由にフリースクールPに来ている子どもたちが多数派を占めていたため、【不登校であるということが〈求心軸〉のような役割】(SG)を果たしており、親やボランティアの協力も得やすかった。

しかし、その後、【高校無償化や広域通信制高校の急増】(SD)などを背景に、「Pは何をするためにやってるの」と問われているとEさんは感じるようになった。【特別支援教育が学校教育法に位置づけられた】(SD)後には、本来であれば「みんなハッピー」になるはずが、Pにやって来る子どもたちの中に「きつい子が増える感じ」を受けた。さらに、【家庭の養育基盤が低下】(SD)し、家庭のことは親に任せるとすることが難しくなった。そこに、【フリースクールPのOBの死】(突発的出来事)という大きな出来事が起こり、これまでやってきたことの地盤が揺らぐような衝撃を受けた。また併行して、不登校であるということが〈求心軸〉としての役割を失ったことで、Eさんは「学校に行かない」という言葉がPの中で「通用しにくくなった」と感じるようになった。

#### 4. 第Ⅳ期：フリースクールの意味の問い直し以降

このような変化を受け、【フリースクールPの意味を問い直した】(OPP) Eさんは、個々人の存在を保障することが求められているという気づきを得た。そして、「いるだけで、いい」という方針でフリースクールPを継続することを決めた。

10年間フリースクールの運営を続ける中で、毎日物が壊れるなど、【度重なるトラブル】(SD)に見舞

われたこともあった。それでも続けることができたのは、【何があっても毎日やって来る子どもたちの存在】(SG)や、一緒に運営していた【スタッフの存在】(SG)、【親の会の人たちの支え】(SG)があったからだった。また、Eさんの両親とパートナーの両親がEさん家族の生活を気にかけてくれたり、Pの新聞記事を大事にとっておいてくれたりするなど、フリースクールを設立・運営するという両親世代の価値観とはかけ離れた行為に対して、設立時から「ずっといろいろな形の応援をしてくれた」(SG)ことも大きな支えとなった。

他方で、EさんはフリースクールPや親の会を通して、子どもや大人個人が抱える違和感を吐き出すだけでなく、社会の現状を打開するための新たな「仕組みをつくる」ことで、母親との価値観のずれを整理しようとしてきた。また、Eさん自身が親になったことも、母親との関係に影響を与えた。親としてのEさんは母親のことを「全然責めようなんて思わない」と語りつつも、「自分の子どもには同じことをしたくないな」という気持ちを抱いている。また、自分の息子との関係から「同性って難しい」と母親との関係を振り返っている。

フリースクール事業に10年間携わった後、子どもと関わるスタッフの仕事に「やり尽くした感」を抱いたEさんは、事務局専任として組織の運営に専念するようになった。自身の子どもがフリースクールPに会員として通うようになり、スタッフとしての関わりが難しくなったことも、その決断を後押しした。

しかしながら、Eさんのフリースクールに対する思いが絶えてしまったわけではない。現在は、自分が体験してきたスタッフとしての「醍醐味」を他の人たちにも味わってもらうため、フリースクールPの基盤整備に尽力している。

同時に、Eさんは親たちと個人が抱える不安や悩みを社会的な課題として捉え直したりしていくことに、スタッフ時代とは異なる「おもしろさ」を見出すようになっている。それを支えているのが、フリースクールに関わる中で得た以下のような気づきである。

世の中の仕組みは、必ず後追的につくられてるんだなっていうことと、(略)ほっといても、障害があるとか、やりにくいか、この世の中ちょっときついなって思ってる人も、都合のいいような、楽しめるような世の中にはそうそうならないもんだなっていうのは、すごくよく分かったんです。で、(世の中に対して)言っていないといけなくて。《2014.2.25》

【学校に行かない子どもや親に対するプレッシャー】(SD)は、EさんがフリースクールIに関わり始めた頃から変わらず強いままである。加えて、【厳しい雇用情勢】(SD)の影響を受け、学校というレールをいったん降りたフリースクールの子どもたちも、社会に出る際には厳しい競争にさらされている。ただ、フリースクールIに関わっていた頃やフリースクールPを立ち上げた頃に比べて、社会に対する反論がしにくくなってきているとEさんは感じている。それゆえ、直接的な反論は回避し、社会が求める生き方とは異なる生き方を発信し、「この社会に風穴をいっぱい開ける」ことが今のフリースクールPにできることだとEさんは考えるようになった。

EさんにはフリースクールPを運営してきた中で、もう1つ気づいたことがある。それは、自分の人生において大事にしたい価値観である。

私、会社にずっと居続けたかっていうと、あの会社にはたぶん居続けられなかったと思うんです。すごーく、自分に嘘ついたらおれたかもしれないけど、なんか、こんなおかしいと思ってたときに、そこと距離を取れたっていうか、そことは違う場に出れたっていうのがおっきくて。(略)なので、何を大事にするかなんだけど、具体的なお金とかなんとかいうよりも、精神的な自由というか、そんなことをやっぱ子どもでも大人でもどんな世代の人も、お年寄りもそうだと思うんだけど、大事にできるようなことを自分がずっとしたい、っていうか自分が生きてる限り、そういうことってずっと紙一重というか、自分事としてあると思うので。《2014.2.25》

この気づきを踏まえ、Eさんは「精神的な自由」を尊重できるような場として、フリースクールPを続けていこうと考えている。

さらに、母親との関係性においては、次のような気づきに至った。

最終的には気がついたことは、私がしあわせになってほしかったんだな、っていうそれに気がついたの。たぶん、うちの親も今はそう思っていて。で、それは母が見える形では、たとえばいい成績をとって、学歴をつけること。(略)その後、私がフリースクールIに関わったり、いろいろ教わったので、私は結婚はしないけれども、子どもは生むって選択をしたりしたんです。で、それに対して、母はもう、すごい泣いたんだけど、でもまあ顔を見たら元気そうな顔をしてるから、これでいいのかなって思うしかなかったんだと思うんだけど。っていうことで、母も自分がやってほしかったことはこれなんだと、なんとなく受け入れないと仕方なかったのかなっていうところかもしれません。《2014.2.25》

このように、母親とEさんとが目指していたところはEさんの「しあわせ」という点で共通していたということに気づいたことで、Eさんは母親との価値観のずれに折り合いをつけられるようになったのである。また、母親自身も自分が求めていた娘のしあわせは「これなんだ」と、Eさんの生き方を受け入れてくれるようになったのではないかとEさんは感じている。

#### 実際には選択しなかった径路からみたフリースクールの意味

ここまで、TEMを用いてEさんの人生の径路を图示してきたが、TEMの特徴の1つが、実際には選択しなかった径路を描く点にある。ここでは、Eさんがフリースクールに出会っていなかった場合、どのような人生を歩んでいたのかという観点から、フリースクールに関わるのがEさんの人生にとって、どのような意味を持っているのかについて明らかにする。

第1回のインタビューをもとに作成したTEM図を見ながら、フリースクールに出会っていなかった場合について問うた筆者に対し、Eさんは次のように答えた。

E: インドに井戸掘りに行くやつとか、トイレつくるやつとかあるでしょ。

筆者: あー、はい。

E: あんなにも応募したりとかしてて、直前に体調崩して行けなかったり。行ったら、ちょっとこれ(人生の径路)、違ってたかもしれないですね。そんなことをしてみたかったりしたかった。

筆者: それは、どういう関心で応募されたんですか。

E: なんやろ。なんやろね。えーっとねえ、そんななここ(フリースクールに出会うということ)と違ってないはずなんで。フリースクール、教育、教育とか。なんやろう。なんか、なんか、いろいろ出会いたかったんでしょね。とにかくね。別に、ボランティアがしたかったとかじゃないんですよ。たぶん。なんか、(違う環境に)飛び出す理由がほしかったのかもしれない。《2015.8.7》

このやりとりから、Eさんにとって海外に飛び出すことと、フリースクールに関わることはそれまでの価値観とは異なる新しい価値観に触れるという点で同じ意味を持つことが分かる。つまり、当時のEさんにとって重要だったのは、新しい価値観に触れることであり、そのためにどのような環境に飛び出すかは重要視されていない。

このように、実際には選択しなかった径路からは、Eさんがフリースクールに関わるようになったのは、新しい価値観に触れることが目的であったということが明らかになった。

#### 本稿の事例におけるセカンド EFP

ここまで、【フリースクールを設立する】と【フリースクールを継続する】を等至点として、対象者の選定及び分析を進めてきた。

しかし、分析の過程から、協力者Eさんにとっての等至点が明らかになった。それが、個々人の価値観を尊重する「精神的な自由」である。

「精神的な自由」を尊重するようになったことで、フリースクールPの実践は「どんどんお金にならない」方向へ向かっている。それでも、Eさんにとって「精神的な自由」は自分が生きている限りずっとついて回るものであり、「お金」より大事にしたいものである。そして、そのことにより【不登校であるということが〈求心軸〉のような役割】(SG)を果たしていた設立当初とは異なり、フリースクールPに関わる子どもや大人が自由な考えを持てるようになり、多様な考えや動機を持った人が関わるようになったとEさんは捉えている。

【精神的な自由の尊重】をEさんにとっての意味のある等至点(セカンドEFP)として設定したことをもって、本稿の分析は飽和状態に達したと判断し、分析を終了した。

### 考察

本節では、前節の分析からみえてきた、フリースクールに関わる中でEさんに生じた学校と社会に対する価値観の変化と、それに伴う人生において大切にしたい価値観への気づき、母親との関係性の変化について考察する。

#### 1. 学校に対する価値観の変化

フリースクールIへの関わりは、Eさんの学校に対する価値観に変化をもたらした。フリースクールIに出会うまでのEさんは、学校に行くという行為を当たり前のものとして内面化し、学校の存在そのものを疑ったことはなかった。しかし、フリースクールIのスタッフとなり、【子どもの声を聴くという実践】(VTE)に出会ったり、【親の会に参加】(VTE)したりするなかで、Bさんは学校の存在を絶対視しない新たな価値観に出会い、吸収していった。

また、これらの経験は、Eさんと母親との関係を編み直す起点にもなっていたと推測される。学校の存在を絶対視しない価値観との出会いは、親から提示され、内面化してきた価値観を問い直す契機であ

り、子どもの声を聴くという実践との出会いや親の会へ参加はこれまでの母親との関係性を問い直すきっかけになったと考えられる。

## 2. 社会に対する価値観の変化

フリースクールIに関わり、その後フリースクールPを設立し、運営してきた経験は、Eさんの社会に対する価値観も変化させた。社会において支配的な価値観を疑うことなく内面化してきたEさんは、フリースクールに関わるまで、「この社会を変えたい」という思いを抱いたことがなかった。それゆえに、【母親との価値観のずれ】(OPP)や就職先である出版社の体質への違和感も、個人的なものとして片付けられ、そこには社会が形成した価値観が影響を与えているというところまでは思い至らなかった。しかし、フリースクールIでの経験を経て、自ら【フリースクールを立ち上げる】(EFP)ことで、子どもが育つ場所が学校しかない社会を変えようとしてきた。また、フリースクールPにおいても、依然強い【学校に行かない子どもや親に対するプレッシャー】(SD)や、近年の【厳しい雇用情勢】(SD)に対して、社会が求める生き方とは異なる生き方を発信することで社会に影響を与えようとしている。このような社会を変えたいという思いは、フリースクールIに出会うまでのEさんにはみられなかったものであり、社会運動としての側面も有するフリースクールに関わる中で培われたといえる。

## 3. 人生において大切にしたい価値観への気づき

上記2つの価値観が変化する中で、Eさんは自身が人生において大切にしたい価値観に気づいた。それが、【精神的な自由の尊重】(セカンドEFP)である。幼少期は親や社会が提示する価値観を当たり前ものとして受け入れていたEさんだったが、フリースクールIで学校に行かないで育つ子どもたちや親の声に出会うことで、意識下にあった学校的な価値観に対する疑問が引き出され、学校の存在を絶対視しない価値観を身につけていった。そして、自ら立ち上げたフリースクールPにおいても、フリースクールIの方針から「ぶれないように」実践を展開していた。ところが、その後フリースクールPに

おいて、不登校であるということが〈求心軸〉としての役割を失ったことで、フリースクールPの存在意義を問い直した。そのことは、Eさん自身が学校の存在を絶対視しない価値観に固執していることに気づききっかけとなった。そして、個々人の価値観を尊重することが人生において大切にしたい価値観だということにたどり着き、フリースクールPにおいても、「いるだけで、いい」という独自の方針を打ち出せるようになった。

なお、この気づきには、母親との価値観のずれから大学進学を機に家を出たことや、会社の体質への違和感から出版社を退職したことなども影響を与えたと考えられるため、フリースクールを通じた変化というよりは、Eさんのこれまでの人生における様々な経験を通して導き出されたものだといえるだろう。

## 4. 価値観の変容と気づきに伴う母親との関係性の成熟

以上の価値観の変容と気づきを受け、母親との関係性も変化してきた。幼少期のEさんにとって母親は規範となる存在であり、それゆえにEさんは母親の価値観とのずれに悩みつつも、それには蓋をして母親の価値観に従うことで円満な関係を保とうとしていた。大学進学に際しても、家から通えない大学という物理的な条件により母親から距離を取るという選択をしており、表面的には高学歴を望む母親の思いに従うことで、関係性に波風を立てないように気を遣っている。

しかし、就職して社会人になったEさんは、自分が「おかしい」と思うことから「距離を取れる」ようになり、退職するという決断を下すことができた。その後、フリースクールIに出会ったEさんは、学校に行かない子どもたちを通して、ルールに乗らない生き方に触れることになる。そして、その経験からEさんは結婚せずに子どもを生むという決断に至ったのである。これらの行為は、母親にとっては理解しがたいものであったが、Eさん自身はしあわせであることから、母親も「自分がやってほしかったことはこれなんだ」とEさんの生き方を受け入れていったとEさんは捉えている。また、Eさんの母

親が、フリースクールPの設立からずっとEさん家族を様々な形で支えてきたという事実も、そのことを示唆している。他方、Eさん自身も母親になったことで、当時の母親の苦悩に思いを馳せられるようになり、母親の価値観も1つの価値観として受け入れられるようになった。

以上のように、Eさんと母親との関係性は、母と娘という関係から、大人の女性同士・母親同士という関係へと変化していく中で、徐々に編み直され、成熟してきたのである。

### 本稿のまとめ

#### フリースクールの設立・運営とEさんの価値観の変容との関連性

以上本稿では、学校親和的であったにもかかわらず、フリースクールに出会い、新たにフリースクールを設立・運営してきたEさんの事例について、TEMを用いて分析・考察した。最後に、フリースクールの設立・運営と、Eさんの価値観の変容とがどのように関連しているのかについてまとめておきたい。

まず、Eさんはこれまでの価値観とは異なる新しい価値観を求めて、フリースクールIに関わるようになった。そして、そこで出会った学校の存在を絶対視しない価値観が、自らフリースクールを設立する動機となった。また、フリースクールIに関わる中で、社会運動としてのフリースクールの存在意義に触れたことも、Eさんの社会に対する価値観を変容させ、新たなフリースクール設立へと向かわせるきっかけとなった。

このような価値観の変容を経て、Eさんは自らフリースクールPを設立するに至った。その後、フリースクールPを運営していく中で、発達障害や病気を理由にフリースクールに通ってくる子どもが現われたり、不登校であるということが求心軸としての役割を失ったりといった変化が生じた。それらの変化を受けて、Eさんはフリースクール実践の意味の問い直しを迫られ、自身が人生において大切にしたい価値観をも問い直し、精神的な自由の尊重にたどり着いた。

つまり、フリースクールIとの出会いによってもたらされた価値観の変容がフリースクールPの設立へとつながり、その運営を通して変容した価値観をさらに問い直したことで、人生全体を貫く価値観への気づきに結びついた。そして、その気づきは幼少期から続く母親との関係における生きづらさの解消につながると同時に、今後の人生の基盤となる価値観を提供したのである。

#### 本稿の限界と今後の課題

本稿では、フリースクールを通じた設立者の価値観の変容に焦点を当てて分析してきた。しかし、設立者の価値観の変容は設立者個人の中で自己完結するわけではなく、周囲の人にも何らかの影響を与える。とりわけ、設立者と密接に関わるフリースクールに通う子どもたちや他のスタッフは、その影響を大いに受けているはずである。今後は、子どもやスタッフへのインタビューについても分析を行うことで、設立者の価値観の変容がフリースクールに関わる人たちにどのような影響を与えているのかについて考察したい。

また、本稿で扱うことができなかった他の5名の協力者の事例についても分析を進めることで、フリースクール設立者の共通点と多様性を浮き彫りにすることが可能になる。同時に、フリースクールを設立・運営する経験が設立者にとってどのような意味を持つのかについても本稿の事例とは異なる視点から検討することができる。

さらに、大人の価値観の変容という点からみれば、設立者の経験を分析するだけでは不十分である。スタッフやボランティアの中で、比較的長期間フリースクールに関わっている大人の経験についても分析を行うことで、フリースクールを通じた大人の価値観の変容プロセスを多角的に描くことが可能になると考えられる。

#### 謝辞

本研究にご協力いただき、語りにくい内容も含めて丁寧に語りを紡いでくださったEさんに心からの感謝と御礼を申し上げます。

## 引用文献

- 朝倉景樹 (1998). 「子ども・若者とスタッフ」『教育のエスノグラフィー——学校現場の今』嵯峨野書院, 305-326.
- 藤根雅之・橋本あかね (2016). 「オルタナティブスクールの現状と課題—全国レベルの質問紙調査に基づく分析から—」『大阪大学教育学年報』21, 89-100.
- 藤田智之 (2002). 「フリースクールの類型化と問題点」『佛教大学大学院紀要』30, 93-107.
- 川喜田二郎 (1967). 『発想法』中央公論新社.
- 菊地栄治・永田佳之 (2001). 「オルタナティブな学び舎の社会学—教育の〈公共性〉を再考する—」『教育社会学研究』68, 65-84.
- Knowles, M. (1980). *The Modern Practice of Adult Education: From Pedagogy to Andragogy*. Cambridge. (ノールズ (著) 堀薫夫・三輪建二 (監訳) (2002). 『成人教育の現代の実践——ペダゴジーからアンドラゴジーへ』鳳書房.)
- 正木遥香 (2016). 「相互作用性に着目した変容的学習論の再評価—『痛み』概念の変遷を手がかりに—」『教育学研究ジャーナル』19, 11-20.
- 松本訓枝 (2004). 「母親たちの家族再構築の試み—『不登校』児の親の会を手がかりにして—」『家族社会学研究』16 (1), 32-40.
- NPO 法人東京シュール (編) (2010). 『フリースクールとはなにか』教育史料出版会.
- NPO 法人東京シュール (2013) 『フリースクール東京シュールごあんない』.
- 奥地圭子 (1991). 『東京シュール物語』教育史料出版会.
- 大沼安史 (1982a). 『教育に強制はいらない』一光社.
- 大沼安史 (編) (1982b). 『続・教育に強制はいらない』—光社.
- 佐川佳之 (2015). 「居場所における支援と子ども—フリースクールの事例から—」『日本教育』445, 14-17.
- サトウタツヤ (2015a). 「複線径路等至性アプローチ (TEA)」安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) 『ワードマップ TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社, 4-8.
- サトウタツヤ (2015b). 「EFP とセカンドEFP」安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) 『ワードマップ TEA 実践編 複線径路等至性アプローチを活用する』新曜社, 8-12.
- 竹村洋介 (2008). 「発達障害の社会学・社会福祉論——特別支援教育・発達障害者支援法・フリースクールでの受け入れを中心にして—」『精神医療 第4次』49, 66-73.
- 東京シュール20周年祭実行委員会 (編) (2005). 『東京シュール20周年記念誌』特定非営利活動法人東京シュール.
- 渡邊洋子 (2002). 『生涯学習時代の成人教育学—学習者支援へのアドヴォカシー—』明石書店.
- 山田哲也 (2011). 「子育ての『困難』を契機に新たな生き方を展望する—不登校児の『親の会』のとりくみから—」『教育』61 (1), 94-102.
- やまだようこ (2007). 「ナラティブ研究」やまだようこ (編) 『質的心理学の方法 語りをきく』新曜社, 54-71.
- 安田裕子 (2015). 「複線性と多様性を描く地図づくり TEM による分析の流れ (その1)」安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) 『ワードマップ TEA 実践編 複線径路等至性アプローチを活用する』新曜社, 41-46.
- 安田裕子・サトウタツヤ (編著) (2012). 『TEM でわかる 人生の径路——質的研究の新展開』誠信書房.
- (2018. 4. 27 受稿) (2018. 12. 20 受理)  
(ホームページ掲載 2019年1月)